

コロナ禍の中、更生の道を歩き始めたある女性の話

初、ラーメン屋で見せたおぼつかない箸使いは、多々羅たちと過ごす中でしっくり持てるようになり、うつむき、暗かった表情は、徐々に明るくなっていった。希望に満ちた瞳。カラオケ屋で見せる笑顔。職場の老人ホームで、一生懸命、老人の世話をする姿。彼女のすべてが愛おしい。

だがそこに、コロナという魔物が入り込んだ。せっかく繋がった社会との糸が、1本ずつ断ち切られていく。

自分の幸せを痛感

もしあの時こうだったら、もしこの人にもっと早く出会っていたら……。しょせんは“たられば”の世界だ。でも、この“たられば”で救われる人は大勢いる。杏に救われた人もたくさんいた。老人ホームの老人もそうだし、後半に出てくるシングルマザーもそうだ。それを阻むのが、往々にして社会だったり制度だったりする。

「保健所の要請」「政府が決めたこと」。せっかく見つけた居場所から締め出された人たちは、どこに救いを求めれば良いのか。「自己責任だ」「世の中は不条理だ」というのは簡単だ。だけどそうした言葉で片づけられない人、必死にやっても滑り落ちてしまう人がいる。自分だっていつ何時そうなるか

分からない。

社会的弱者という言葉が聞かれるようになって久しいが、その弱者にとって必要なことは何なのだろう。社会的セーフティーネットというものはあるが、果たしてそれは、必要とする人に行き渡っているのだろうか。普段はひとごとと思っていたことが、この映画を見たことで、にわかに自分のこととして捉えられ、同時に、自分がこうして普通の生活を送れていることが、どれほど幸せなことかと痛感する。

杏を演じるのは、話題になったテレビドラマ「不適切にもほどがある!」で、主人公の娘・小川純子を演じた河合優実。22年公開の映画「PLAN 75」でのコールセンターの職員役も印象に残ったが、その時とも純子ともまるで違う表情に魅了された。「この役と、主人公のモデルになった女性を自分が守る。絶対に守らなきゃと、まず心に決め」、役に臨んだそうだが、杏という女性が確かな存在として実感できたのは、彼女がそうした覚悟を持って演じたからだろう。

初めて警察に捕まった杏（左）は、刑事の多々羅（右）の取調べを受ける



決めうち この1本

りん たいこ

ライター。「週刊エコノミスト」や「FLIX」などで映画紹介やインタビュー記事を手掛ける。【近況】柚月裕子さんの小説にはまっています。まだ数冊ですが、「盤上の向日葵」と「慈雨」は良かった。お薦めです。



© 2023「あんのこと」製作委員会

あんのこと

6月7日より新宿武蔵野館ほか全国で公開

監督・脚本：入江悠

出演：河合優美、佐藤二朗、稲垣吾郎、河井青葉、
広岡由里子、早見あかり

2023年／日本／114分／キノフィルムズ配給

辛い話です。でも間違いなく、“気づき”を与えてくれる映画です。新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた2020年。その中で必死に生きるひとりの女性の姿を、実際にあった出来事を基に描いていきます。

“普通” だけれど大きな一歩

20歳の香川杏は、ホステスの母と、脚の悪い祖母と暮らしている。子供の頃から酔った母に殴られて育った彼女は、小学4年で不登校になり、12歳の時、初めて体を売った。その後、覚せい剤に手を出し、いつしか依存症になっていった。そんな彼女に手を差し伸べたのが、刑事の多々羅だった。彼が主催する薬物更生者の自助グループ

の集会に参加し、そこで知り合った週刊誌記者の桐野らと交流する中で、彼女は少しずつ更生の道を歩き始める。ところが、コロナが蔓延し始め……。

杏は、母親にいわれるがまま体を売り、抵抗すると殴られた。なぜ逃げ出さなかったのか？ そう考えずにはいられないが、杏には杏なりの思いがあったのだろう。そんな彼女が変わり始める。

多々羅と知り合ってから杏は、彼の勧めに従い、日記帳に、薬を使わなかった日に丸を書いていく。新しい仕事に就き、少しずつ、だけど確実に“普通の生活”を始めていく。“普通”は彼女にとって大きな一歩だ。その一歩を踏み出すには、とても勇気がいったはずだ。それを彼女はやってのけた。当